



皮膚病変は目に見えるけれど……

大松 華子

国立病院機構相模原病院皮膚科部長

皮膚科の魅力は何かと問われて、「病変が目に見える」ことをあげられる方は多いと思います。皮膚病変は患者さんにも医師にも同じように見えるので、よくなれば一目瞭然。当初は「見(診)る➡患者さんと会話する➡治療効果についての感想を共有する」という流れがあるものだと思っていました。

しかし実際に皮膚科診療を始めてみると、病状経過についての認識は記憶に基づいており、記憶は心理的要素の影響を受けて形成されることに気がつきました。そもそも前回診察時の皮疹を覚えていなければ、改善しているのか悪化しているのかの判断はできません。よほど記憶力のよい医師でない限り、すべての患者さんの皮疹を正確に記憶しておくことは不可能です。そこで私たちは、診察時に患者さんの訴えや皮疹の所見をカルテに記載し、前回の記載内容と比較して今回の病状評価を行います。一方、患者さんが症状を記録されていることは少なく、ご自分の記憶を基にして、改善もしくは悪化の判断をされます。そのため、現在消失している皮疹が前回存在していたことを記憶されていないと、皮疹は減少しているのに「全然よくならない」といった訴えになることがあります。

また、皮疹に関する患者さんの記憶が正確だったとしても「患者さんが一番気にされている症状」が改善しない限り、治療満足感は得られにくいです。たとえば皮疹そのものよりも「痛みや痒みといった随伴感覚」を患者さんが苦にされていた場合、いくら皮疹の見た目が改善しても、感覚が改善しなけ

れば満足感は得られません。患者さんは「前回の病状＝主に気になっていた症状」という風に記憶されていることが多く、「主に何が気になっていたか」という心理的要素が病状記憶に影響を与えているように思います。

せっかく受診いただいているのですから、できれば治療効果に満足していただきたいものです。ではどのようにして満足していただくか。大前提として適切な治療で病状をよくする必要があります。加えて患者さんが気にされている症状を聴取して、重点的にアプローチします。プラスαの工夫として、写真や臨床スコアは有用なことが多いです。たとえばアトピー性皮膚炎の患者さんでは、診察時に皮疹をデジタルカメラで撮影して経時的変化をお見せすると、どの部分がどれくらい改善したかを実感いただきやすいです。またEASI、NRS、POEM等のスコア変化をお示しすると、「数字が減る」というわかりやすい変化により治療効果を感じていただけます。とくに「痒み」といった主観的な症状は、数値化されると改善が理解されやすいように思います。

皮膚に目で見える病変が存在する「皮膚科」は、治療効果の判定がしやすい科だと思います。ですが「皮膚病変がよくなったことは、見ればわかるだろう」と油断せず、ちょっとした工夫を加えることにより患者さんの満足度を上げて、日々の診療をよりよくすることができればと思っています。